

日本中世の街道交易伝承と「関」(中)

— 『吉次祠堂記』を参照しつつ —

A Folklore of Highway Trade and Checkpoints in Medieval Japan (Volume Two):
With Reference to *Kichiji-Shidoki*

成城大学名誉教授

山田直巳 YAMADA, Naomi

はじめに

本稿は、〈「日本中世の街道交易伝承と「関」(上)〉※の続稿である。前稿において、(1) 情報集散のくびきとなる「関」の問題、(2) 伝承(folklore)の空間的広がりやと文献展開の問題、(3) 炭焼き長者譚と交易伝承の接点の問題、(4) 炭焼き長者譚とその民俗がもたらすもの、(5) 昔話「炭焼き長者」のバリエーションといった項目を各々論点として、可能な限りの追究をしてきた。そしてその論点を踏まえ、新紹介資料である『吉次祠堂記』の解説に及び、その解説を順次すすめてきたわけであるが、その続稿を記すことから始めた。

三、『吉次祠堂記』解説

(承前) 昔の『祖庭事苑¹⁾』に、中国春秋時代の刀工干将が鍛えた二口の刀(「干将」「莫邪」)のことが記されるが、「干将」を陽とし、「莫邪」を陰とする。「莫邪」は妻の莫邪の髪を炉に入れて作りあげたといわれる。であるから剣の「莫邪」は妻に属し、日は北戸に出で、南山に松がある、というのである。石の中から生ずるとも言われ、剣はその石の中にあるとも言う。後にその子孫は、

眉間を寄せて思惟し、柱を裂いてその剣を得た。今現在、刀の銘とする数字もそれに関わる。もしたまたま万世の後になって通神の人が現れ、よく思惟し、干を虚しく雀の三踊り鳥の踊り返しというだけである。自分は聴いた、龍猛大士(龍樹²⁾)が南天の鉄塔を開き、空海大師東塔の鉄柱を割いた、と。先賢とはこのようなものだ。ただすべからず時運を俟つべきではなからうか。

次に治承年中(1177～)に信高兄弟が商家の利ばかりを心に思い、京の都に往還して、もっぱら砂金の交易に務め、東海を觀て回りもって財貨を溜め込むと、ある朝、朱雀大路西側一右京を出て、故国に帰ろうと思ひ、ようやく信州の薄井(碓井)まで帰ってきたとき、山越え野越えして廻り、山川を乗り越え来たところ、群盜が石のごろごろした岩陰から秘かに信高兄弟を窺っていた。群盜の頭に藤沢入道という者があった。これは先年赤坂亭で義経のために討たれた熊坂長範と同様、山野を家とし群れをなし、人の財貨を盗み、害をなす者どもである。藤沢入道を頭とする群盜たちが信高兄弟を襲ってきて財貨を奪おうとした。信高兄弟は部下を指揮して、これら盜賊を尽く打ち破り、ようやくここまで逃げてきたが、各自はかなりの深傷を蒙った。しかして、信高兄弟は頭を並べて倒れてしまった。しばらくすると群盜は追いついてきて、周りを取り囲んだ。信高の家童が僅

かの人数残ったが、みな体中に疵をうけ、ましてや長い道のりに疲れ、とても敵対する力はなく、終に賊のために撃たれ死んでしまった。群盗たちは信高が財貨を入れてきた皮籠を開いて、田の間に担いでいって分け合い、橋の上で分割し、群盗たちはそれをもってどこかに逃げ去り、行方知れずになった。その事件の時より、その橋を「小金橋」といい、その田んぼを「金分け田」と称するようになり、また吉野宿を改めて、皮籠村と呼ぶことがここから始ったのだ。詩にいわく、

春令原に在り、兄弟急難あり。良朋ありといえども、状況が状況である。永く嘆息する。嗚呼は何れの日ぞや、郷呂の諸父図らず遙かに此の急難を聞き、殆ど衷情に耐えず。空しく其の縦を追随し、死喪の禍を畏れず。山河の険を憚らず、羽州宝沢より石を運び、材を送り、車に架し、馬に汗して、ここに到りてもって棺郭をつくり、地を卜し、日を択びて家童干弗献り、使い令めて、挽歌を和して、厚く濱葬をなし、又石を琢き、徳を書して、用いて不朽を図る。その古碑今猶在り。然るに家童十人の石碑なるもの、何れの代におけるや、曾て之を閑却して新たにもってこれを建つ。何人のなす所というを識らざるなり。夫れ貨殖の家たるや、行を商と曰い、処を佃と曰い、金玉を貸と曰い、布ハクを賄と曰い。古の市をなすもので、そのある処をもって、その無き処に易えるものである。信高兄弟はまさにそれを行とする類の者である。

この詩の後半から終いまでは、「古文真宝桂林抄」の坤の巻に「商は遠行て売買をするぞ、行商坐かと云ぞ」とあるに近似する。その前半は、羽州（秋田・山形県に跨る）から運んだ石で碑を作り、今に残る記念としたことが記される。羽州の宝沢より石を運び、その材料は馬に汗をかかせ、棺廓をつくり、その地を卜定し、供養の日を選択し、家童、干仏、挽歌を和し、葬儀をなし、石碑の石を磨き、その徳を記銘し、その不朽をはかる碑を建立した。

君子の言うところによれば、信高兄弟が「酒を入れる皮製の袋」を海に浮かべ、もって利を追求

するだけではないとしても、どうして深い意味が無いだろうか。ここに深い意図を知るべきである。すなわち義経朝臣が、他日時に乗じて大群を率いて京の都に攻め上る、そのための兵糧準備を目的とするものであった。要するに、信高兄弟が利を求め財を貪るには訳がある。それは、義経が挙兵するときの兵糧のため。この故に、兄弟共に遠く商売をして、艱難をなめて準備し、財貨を驟め、軍旅の貯蓄に努めたのである。ただ単に膝を屈め、財を貪り、利益を追求して、市に倒れる者と同じに論ぜられるものではない。

また、ある人が云うには、吉次信高は後に改名して、義経の家臣となる、という。またある人が云うには、信高は姓名を変えて、曾って頼朝の家臣となった、という。後これを理由として、罪を受けるとも言う。自分がこれを案ずるに、今皮籠村に吉六の墳墓だけ別のところにある。父老（古老）の言うところによれば、吉六は義経の命令に背いた。これゆえに別のところに葬られたという、云々。今の墳墓の状況を観察する者は、以上の次第を踏まえて理解すべきである。

高倉院治承四年（1180）、義経が出羽・奥州の士卒を率いて出立の日、信高兄弟の墳墓に詣で、これに告げて云った。「嗚呼忠烈天地の偉人、しばしば不運にめぐり合う。度に憤り嘆き死す。ただし身は滅んでも、心は死せず千歳に生き続ける。それはいわば無窮という印象である。自分は今、数千の士卒を率いて、もって敵を罰しようとする。時ここに到り、信高兄弟の力がなかったならば、とてもここに及ばず。義経はこれを心に深く刻み、何時とてこのことを忘れる事があるか。自分はこの挙兵に当たって、ここに兄弟を呼び、而してこれを生き返らせ、骨に肉を甦らせたいと思う。当社の八幡宮とともに相殿として秘かにこれを勧請したのはその所以である。

向かうに道は況なり。春令原にあり。兄弟はここで難に遭う。身を原野に棄てるということは、命がここに窮まってしまうことを示している。今も義経の所以によって、吉次神社と称せられ、名を万世に伝えるということになれば、徳はまさにここに輝くというわけである。陶朱公（中国春

秋時代の越王勾踐の臣)が功なり名を遂げた故事の、十倍に値するほどの誉れではないか。信高が没してから享保年間(元年は、1716)に到るまでといえば、五百余年を経過したことになる。しかるに七十年前、この村に農夫、長四郎と云う者があった。ある日、馬を田野に放して、飼葉を食わせた。夕方、家に連れ帰って、馬を厩に繋ごうとしてこれを良く見れば、馬は嘶き、朱漆を帯びている。長四郎はすこぶる怪しみて、密かに蹄の跡をたどって、山野、田間、幽谷の絶境に到るまで、尽くこれを尋ね調べたけれど、聊かも朱漆の埋められたところを発見できなかった。そこである村の農夫を招いて、このことを語った。農夫野人たちはあれこれ議論して言うことには、古老の伝承に、古くこの地に朱漆と砂金とを埋めたという伝承があり、それは村人の中で大変に著名な話題であった。これは虚談ではない。まず丘陵地、そのもっとも高い所を発掘してみるべきである。農夫たちは、皆賛成して、各々鍬を携え、予め推定できる場所を所どころ掘ってみた。しかし何れの者も「朱漆・砂金」を得た者はなかった。後にまた相談して、信高墳墓の畔を発掘するに及んで、一天俄かに掻き曇り、驟雨峨然として降り、雷が碾き白をごろごろと鳴らすように轟かす。農夫は驚いて発掘を止めた。ここに一人の老父があった。指示に従わず、一人進んでこれを否定して言った。雷雨は、炎暑の耐え難きにあって鳴り起り、午熱より晩涼に到り過ぎる。これを考えてみると、極陰の節を期して、これを穿たば、必ず霹靂の憂いは無くなる。東方がまだ曙にならない前(早朝)にムラ挙って群れをなし、農具を握って競い、各自でこれを掘る。その深さは、丈(≒3.3尺)余に及ぶ。下に泥土なし。ただ海中の砂石を積んだ、郭外を封ずる。里人、猶その底を極めようと欲して、各々ここに進んで力を尽くし、これを掘り進んだところ、数刻の間、疾風迅雷は怒って山川を抜き、雷霆天地に震い、稲光は矢を射るようである。農夫はここにおいて恐れ、戦慄して急に走り去ろうと思うが、足がまともに踏めず、鍬を放り出し、再び話題にしなかった。

君子の言うことに、古の司馬光(中国、北宋の

学者、政治家)の墓を発こうと願う。哲宗は従わない。野鹿が僅かに墓松に触れて、ついに猛獣のために殺された。沙宇子はかつて祖廟を作って、天子を補佐する「三公」になると、他人の墳墓を発くことや盛徳を失うことは行ってはならないと指摘した。今匹夫編戸の民は、これと同日に語ることはできないが、昔時皮籠村の農夫、各々財貨を貪りて、吉次の神祠を明らかにするに到り、すなわちこれを獄吏に送るとしても、なお発くことはあってはならない。

ある人が云うに、諺としてこういう事が伝わっている、と。白河の商貨金銭を交易すること僅かで、千の位になるといっても万の位に充ちる事はない。吉次の霊が、これを留めているのである。ああそれなのに、その昔、皮籠村の野人、先賢の廟を毀して、それでもって、財を貪ることをした。そのような連中に対し、神は富を与えなかった。今より、商家(商人・あきんど)を生業とする者はすべからくこれを察すべきである。

次に宝永六年(1709)四月、巡検使台³⁾、命を受けて奥州を巡邏した。その折に、当社の来由を尋ねられた。次に享保丁酉(2年、1717)四月に巡検使がここにやって来て、この村の少吏塩田平三郎を呼んで、当社の濫觴・由来を尋ねた。塩田の語る場所は、凡そ世の名づけある神社には、たとえ小祠であっても、その由来をきちんと調べておくべきである。どうして、現在の社がこのように到ったかを明らかにして置くべきである。すなわち祠堂を建つことに到った経緯である。

平三郎の子孫は、その過去の経緯を踏まえ、速やかに白河県令(明治4年<1871>~明治19年まで。後に知事)に、「さる享保丁酉(1717)の秋八月、匠を招きまず神祠を建て、明年3月におよび殿堂が完成した。そこで神司を呼び、遷宮を実施し、ムラ全体の春祀りを実施した。」などの創建由来を報告した。

客があった。ある日天阿に語って言うことには。我かつて、神司に奉ずることを考えた。あるとき事情があつて、永い間遠方に勤務することとなった。この度赦しがあつて、再び白河に帰り、この村に住んで、今は農夫として生きている。しかし

神の威厳あることを忘れる事ができなかった。そこで密かにこの祠堂の廃れ壊れていることを観るにつけ、強い悲しみを感じた。このままでは、この神社の濫觴も忘れ去られてしまうのではないかと危惧されたのだ。ここに旧記がある。惜しいことに、この文章は和文であった。そこでこれを漢字(文)に改めようと願った。これを写したなら、自分としては満足である。しかし自分はあえて承諾しなかった。

客に答えていった。かつて鳳を吐く夢も無く、かつ雲を凌ぐ文章も無かった。何をもってこれに対したらよいか。徒に古帖をあれこれ考えて、困難な仕事だからといって、これを避けてはいけないう。数日後には草書が完成した。然るに大変拙く、田舎っぺいが、後の人がこれを正してくれよう。これのために銘を作って、恭しく祀ろう。その銘は次のようである。

陸奥の喉元、ここ白河は来往頻繁。
延喜式にはじまり、義家の時に至って
既に廃れ壊れ始めていたので、一気に事業を
壮んにする
兵は矛と鎧を輝かせ、鳩は旗に止まる
官軍は詔を奉じ、師は敵を撃ち平らげる
謹んでこの社に詣り、新に宮祠を建てる
岩清水八幡にならって、その瑞垣を移す
道に古今なし、世に盛衰あり
祭祀また絶つ、廟堂支離せり
信高再びたすける、神明は益々不思議である

署名は「北越散士」とあり、皮籠村での出来事で、時は明治27年4月のことであった。

明治27年には、どんな政治・社会の動きが見られるだろうか。目立つものをピックアップしてみる。3月臨時総選挙、6月朝鮮出兵を閣議決定、8月清国に宣戦布告など。その前年は、5月戦時大本営条例交付などがあり、朝鮮半島、中国、東南アジアなど様々なエリアで動きが見られる。白河の関は古代の駅として、情報の頸城一境界線として非常に重要な位置を占めていたが、明治時代であって、まさにローカルそのものであった。そのローカルな場が『吉次祠堂記』という記録の中

で、戦闘が意識され、戦意高揚が刻まれていた。つまり、田舎世界として隔絶していたと思われるのに、明治近代の世界の様々な動きとパラレルな形で様々が進行していたことに気づかせられるのである。なお類似の現象が、規模は小さいが昭和になって一種のリバイバルとして生じていたことを付記しておきたい。即ち、「吉次和讃⁴⁾」の製作である。

四、情報と歌枕

—「あぶくま」「白河」の位相—

中古、中世の歌に詠まれた「あぶくま(阿武隈)」はどのような位置を占めるであろうか。歌枕という文化のパッケージには、時間・空間の位置関係がきちりと埋め込まれ、どのようなイメージとしてそれがあり得るかを明示する。その時代における阿武隈(白河)がどうであったのかを実にすっきりと現代に伝えていたのである。阿武隈は川として、空間的境界線を位置付け、それが都びとにどのような価値のものとして存在したかを明示しているのである。白河は関として位置し、都びとの意識を明示する。これ以前と以後とをである。

それでは、具体的に『古今和歌集』から順次「あぶくま」を点検していこう。

『古今和歌集』 卷二十 東歌

①あぶくまに霧たちくもり明けぬとも 君をば
やらじ待てばすべなし

『後撰和歌集』 藤原輔久

②夜と共にあぶくま川の遠ければ 庭なるかげ
も見ぬぞ悲しき

女のさうしに夜よ立ちよりもなどいひし
後

③あぶくまの霧とはなしによもすがら 立ちわ
たりつつよにもふるかな

『金葉和歌集』 橘為仲朝臣陸奥守にて侍りける
時、延任しぬと聞きてつかわしける

藤原隆資

④待つ我はあはれやそぢになりぬを あぶくま
川のとほざかりぬる

『新後拾遺和歌集』 前内大臣

⑤君が世にあぶくまがわの渡し舟 むかしの夢
のためしとものがな

権中納言為重

⑥立くもる霧のへだての末みへて あぶくま川
にあまるしらなみ

『拾遺和歌集』 祝部成久

⑦またれつる此の瀬もすぎぬ君が世に あぶく
ま川の名をたのめとも

二條院讃岐

⑧いかなれば涙の雨はひまなきを あぶくま川
の瀬絶しぬらん

『堀川百首』 藤原顕仲朝臣

⑨名にしおはばあぶくま川を渡りみん 恋しき
人のかげやうつと

権僧正永縁

⑩ぬれ衣といふにつけてや流れけん あぶくま
がわの名残おしさに

『詞花和歌集』 巻第五

一條院上東門院に行幸ささせ給けるにうめる
入道前太政大臣（藤原道長）

⑪君が世にあぶくま河のそこきよみ 千年をへ
つつすまむとそ思う

『新古今和歌集』 巻第九

みちのくにに介にて罷りける時、範永朝臣の
もとに遣はしける

高階経重朝臣

⑫行末にあぶくま川のなかりせば いかにかせ
まし今日の別を

返し 藤原範永朝臣

⑬君にまたあぶくま川を待つべきに 残すくな
き我ぞかなしき

『新後撰和歌集』 民部卿成範

⑭年ふれど渡らぬなりに流るるを 逢隈川と誰
かいひつる

『建保三年名所百首御歌』 順徳院御製

⑮あすは又あぶくま川のしがらみに きのふの
秋の色やのこらむ

前中納言定家卿

⑯たちくもるあぶくま河の霧のまに 秋をばや
らぬせきをすゑなん

『最勝四天王院名所御障子』 読人不知

⑰あぶくまをいづれと人に問ひつれば なこそ
のせきのあなたなりけり

『建保二年千五百番歌合』 小侍従

⑱名にしおはば尋ねも行かんみちのくの あぶ
くま河はほど遠くとも

『中務家集』 敦慶親王女

⑲かくしつつよをやつくさむ陸奥の あぶくま
河はいかがわたらむ

かへし

⑳あぶくまを渡りもはてぬものならば はかな
はかなにわれいかにせん

以上ざっと二十首ほどあげてみた。検索をかけてみれば「あぶくま」はあまりに夥しくとてもその全貌などは言い尽くせない。つまり「あぶくま」は、陸奥一福島以北（東北六県）に関わる歌枕として普遍的であった。歌枕はいわば記号で、それを冠することで、そこへのイメージが重ね加えられるという表現機能を持っていた。体験的なものではなく、言葉のイメージの重畳である。平安貴族、あるいは中世世界に入っても、殆どの歌人にとって、体験的現実感はなかったであろう。そのことは『陸奥話記』『将門記』『後三年合戦絵詞』などを見れば明らかで、東北地方が平安あるいは中世都人にとってなんらリアリティーをもって理解されていたとは思えない。まさに歌枕は、そこへのイメージを誘うものとしてあり、それこそが、彼らのリアリティーであった。

さて、夥しい数の「あぶくま」を含んだ歌があり、それらが具体的にはどんな陸奥像を形成していたのか、点検してみたい。①②に観られるように、あぶくまは暗く閉じたイメージを持つ。霧が立ち込め、遠隔の地であり、人々の接触、触れ合いを妨げるイメージを引き出してくるのに有効な表現素材であった。①③⑥⑬に霧が詠みこまれ、②④にあるように「遠隔地」が象徴される。「あぶくま」が川であることはよく認識されていたようで、⑤⑨⑭⑲⑳にみるように「渡し舟」が必要であると詠み込まれている。何れの歌のレトリックも「あぶくま」の具体的な表情ではなく、あるパターン化（典型）された抽象的表情としてのそ

れであった。⑦のように「待つ川岸（瀬）がその名に期待して待つ」けれどそれは効果がないという状況に結ぶ。⑨⑩に「名にしおはば」とあり、そこでは川の瀬の面に「恋しい人の姿」が映るとも描く。⑩は「あぶくま」は遠くとも訊ねていきたい場所であった。⑭では「逢隈」と文字遊びが展開し、「隈」つまり翳になってしまっていて見えない部分を照らし出す「逢う」と表現を構成することで、新しい発展（レトリック）になっている。経年変化をうけて、交流が絶たれてしまったままに流れができてしまっている川に対して、だれが「逢隈川」と逆に表現したのかしら、と畳み掛けることで、新しい境地ができていくわけである。

さて、では「白河」はどうであろうか。まず和歌から点検する。

『拾遺和歌集』巻六 平兼盛

①たよりあらばいかでみやこへ告げやらむ け
ふ白河の関はこえぬと

『一遍上人絵伝』（弘安三年） 一遍上人

②ゆく人を弥陀のちかいにもらさじと 名をこ
そとむれしらかはの関

『公任集』 前大納言藤原公任

みちさだがみちのくにに下るに、めのしきぶ
がやりける歌をきき給ひて

③今更に霞へだつる白河の 関をはじめてたず
ぬべしやは

『最勝四天王院障子和歌』 後鳥羽上皇

④雪にしく袖も夢路よたへぬべし まだしらか
はの関のあらしに

雅経

⑤思い送る人はありとも東路や 雪降りぬとは
白河の関

具親

⑥都より初雪寒し東路や みちのおくなるしら
かは

『新後撰和歌集』 藤原範頼女

⑦音にのみ吹くともききし秋風の 袖になれぬ
るしらかはの関

『一宮紀伊集』 祐子内親王家紀伊

⑧越ぬよりおもひこそやれみちのくの 名に流

れたるしらかはの関

『為仲集』 橘為仲

十一月七日、白川のせきを過ぎ侍りしに雪ふ
り侍りしかば

⑨人づてに聞渡りしを年ふりて けふ雪すぎぬ
しらかはの関

白河の関をいづる間ももみぢいと面白し

⑩もみぢ葉のかかるおりにはしらかはの 関は
名をこそかふべかりけれ

白河院にて関路のほととぎすといふことを

⑪吾妻路にことづてやせし郭公 関のいはかど
今ぞすぐなる

『和泉式部集』 和泉式部

また、さゑもんのかみ、みちのくのかみのく
だりしころ、それにうちそへたる事ぞみし

⑫今更に霞のとづる白河の 関をしめてはたづ
ぬべしやは

『雲葉和歌集』 俊成卿

法性寺釣殿にて歌合侍りけるに、関路落葉を

⑬いろいろの木の葉にみちも埋もれて 名をさ
へたどるしらかはの関

『千載和歌集』 巻第五 秋歌下 左大弁親宗

⑭もみぢ葉のみなくれないに散しけば 名のみ
なりけりしらかはの関

巻第八騎旅歌 僧都印性

⑮あづま路も年も末にやなりぬらん 雪ふりに
けりしらかはの関

『新統古今和歌集』 寂蓮法師

⑯あふさかを越えだにはてぬ秋風に 末こそ思
へしらかはの関

藤原季茂

⑰みやこ出て日数は冬に成りにけり しぐれて
寒きしらかはの関

『新拾遺和歌集』 丹後守忠守

⑱こよひこそ月に越ぬる秋風の 音のみ聞しし
らかはの関

西行法師

⑲みやこ出て逢坂こへしをりとは 心かすめ
し白河のせき

『夫木抄』 巻第二十 読人不知

人忘れずの山

⑳陸奥のあぶくま川のこなたにぞ 人忘れずの
山はさかしき

以上二十首、様々な代表的な歌集から「しらかは」を見てきたわけであるが、⑳を除きすべて「しらかは」は「関」にかかるものであった。「あぶくま」も境界を作る川であったが、「しらかは」は人工的な「関」である。いずれにしても二つの文化領域、空間認識を限るもので、分割するメルクマールであった。つまり「ここを越える」と表現すれば、異文化領域に踏み込むことを意味した。もちろん実体験としてのそれではないが、抽象的な意識、認識を限るものとして表現を構成する要素であった。前稿で「逢坂」「鼠」「勿来」「白河」などの関を問題とし、そこが情報集散のキーポイントとなることを指摘したが、まさにここを抑えれば、情報の流れを止める事ができた。当然なことであるが、情報だけでなく、「人」「もの」「金」をコントロールできたのである。さればこそ歌舞伎「勧進帳」の「安宅関」がテーマたりえたと前稿で指摘したとおりである。

先に「しらかは」の関が体験的な「関」ではなく、イメージの産物だと指摘したが、③「霞へだつる」、④「まだしらかは」、⑤「雪降りぬとは白河の」、⑥「都より初雪さむし東路や」、⑨「人づてに聞き渡る」、⑬「名をさへたどる」、⑭「名のみなりけり」、⑱「音のみ聞きし」等々に見られるように、まさにレトリックの成果であった。また④「関の嵐」、⑤「雪降りぬ」、と気候、環境の著しく異なる状況を描出してみせた。こう描くことで、「漂泊」放浪が刻まれる。孤独、寂しさを提示し、「定住」とのコントラストを取ろうとした。さらには⑰「みやこ出て日数は冬に成りにけりしぐれて寒きしらかはの関」、⑲「みやこ出て逢坂こへしをりとは 心かすめし白河の関」と体験を遙かに越えた（つまり知識上の、埒外といった）遠方、と印象付ける表現であったのである。

五、情報の地方伝達

—そして漂泊者の意識—

口頭伝承という形での情報伝達は、変化しやす

い側面を持つ。それがある枠組みを持つためには、一定数の伝承者集団を持つ事が求められる。その数が少数であれば、例えば死に絶えてしまうことも十分考えられる。伝承の断絶である。しかし一定以上の集団があれば、その集団が維持されていくためにその伝承を守らなければならなくなるのである。いわば、集団がそれを維持するために必要な伝承（エートス）であるからである。そこでは形の変化はあっても、質の変化は起きにくい。大枠としての質は維持されなければならないのである⁵⁾。

その形に変化をもたらずのが、集団の外からやってくる外来漂泊者である。ここで取り上げようとする漂泊者は、まさにその情報伝達の当事者ということになるであろう。能因法師、西行、宗祇、道興などがその代表格である。近世であれば、芭蕉(1644～1694)、菅江真澄(1754～1829)や一茶(1763～1827)等々の行跡も興味深い。

さて白河関にかかわって注目したいのは、まず能因法師(988～?)である。『能因法師集』のページを開いてみよう。こんな記述がある。

二年の春みちのくにあからさまに、くだると
て白河の関にやどりて、

都をばかすみとともにたちしかど 秋風ぞ吹く
しらかはの関

「しらかはの関」がどれほど遠方であるとしても、「霞(春)」と「秋風」ではあまりに隔たりすぎていないか。前節で検討したように、いわば神話的距離である。あまりに離れすぎている。この距離はイメージの距離であり、いわば神話的距離であった。時間と移動スピードを考えたとき、直線的に考えてしまうと実態と著しく離れ、現実と対応しない。つまり、「旅に棲む⁶⁾」ことを考えなければいけない。移動が日常となっている旅である。陸奥に下るとあるから、白河以東に目的地があるのであろう。そこで、白河の関に「宿つた」のである。そして、その折の感慨を何と長い旅路であることよ、と語ったことになる。能因は平安中期の歌人ということであるが、先に『陸奥話記』『将門記』などを紹介して記したように、現在からは想像できないほどの交通不便なエリアであ

る。まさに命がけの漂泊の旅であったろう。したがって、平安、あるいは中世歌人たちが捉えた〈想像上の白河関〉になるほかなかったのである。能因もまたその範囲を出ていないことになる。彼は自ら漂泊の旅をし、そこで得た知見を都に情報として齎さなければならなかったのであるが、実態はまさにこの歌に見られる通りであった。

次の代表的漂泊者は、西行法師（1118～1190）である。『西行法師集』に、「白河の関路のさくら咲にけりあづまよりくる人のまれなり」と詠んで、東路のはるか西の都からやってくる人の稀なことをいっていた。彼の『山家集』に、

みちのくにへ、修行してまかりけるに、白川の関にとどまりて、ところがらにや、つねよりも月おもしろくあはれにて、能因が秋風ふくと申しけんをり、いつなりけんと思ひ出でられて名残おほく覚えければ、せきやのはしらに書きつけける。

しらかはの関屋を月のもるかげは 人の心をとむるなりけり

とある。西行法師は、この旅がまさに自ら修行だといっており、しかし場所が場所だからと、そのつもりでみているから、月が興味深くしみじみと照っているという。そして、その連想で、大先輩の能因が「秋吹く風」といったのは、何時のことであろうかと考え、まことに名残多く感じたので、「しらかはの一」が一首浮かんだという。漂泊の人、能因を思い、そこでの能因の感興が連想され、さらには自らの歌「人の心をとむる」に結実していく。その月の光が格別であったのである。能因の感興の上に西行のそれが重なり、新たな一首になっていく。それもここが白河関という格別な場というか、シチュエーションであったからである。

能因法師と西行法師の伝承伝達と情報伝達が重なり、新たな詩が誕生する。そこに触媒としての場、白河の関があるわけである。

さて次に、遍歴の宗教者として著名な一遍上人（1239～1289）を取り上げてみたい。時宗の開祖として著名であり、布教に全国行脚した一遍もまた白河関という特殊な場を活かさないとはい

なかった。『一遍上人絵詞伝』を紐解いてみよう。弘安三年の条。

弘安三季（年）、奥州へ趣給ふ。修行日を送りて、地形一にあらず。月は野草の露より出て、遠樹の梢をいとほぬ境もあり。日は海岸の霧に傾て、双松の緑にうつろふ所もあり。かくて白河の関にかかられけるに、「関屋を月のもるかげは人の心をとむるなりけり」と、西行が読み侍りけるをおもひ出られて、せきやの柱に書き付け給ける。

他阿弥陀仏

しら川のせきぢにも猶とどまらじ 心のおくのはてしなれば

聖も又よみてかかれける

ゆく人を弥陀のちかひにもらさじと 名をこそとむれしらかはのせき

一遍は西行の事跡をきちつうけ、「西行が読み侍りけるをおもひ出られて」と記していた。

さて次に宗祇（1421～1502）の『白河紀行』を開いてみたい。

白川の関に到れる道のほど、谷の小河、峯の松風など、何となく常よりは哀れふかく侍るに、このもかもの梢むらむら落ちばして、山賊の柄もあらはに、麓の沢には、霜かれのあし下折れて、さをしかの妻とはん岡への田の面も守る人絶えて、かたぶきたる庵に引板のかけ縄朽ち残りたるは、音するよりはさびしさ増りて（中略）心空にて、駒の足をはやめいそぐに、関にいたりて、中々言のはにのべがたし、只二所明神のかみさびたるに、一方はいかにもきらびやかに、社頭神殿も神々しく侍るに、今一かたは、ふりはてて、苔を軒端とし、（中略）木枯のみぞ手向をばし侍ると見えて感涙とどめがたきに、兼盛、能因ここにのぞみて、いかばかりの哀れ侍りけんとおもひやるに、（以下略）。

こうして宗祇自身の歌を二首、平之盛、穆翁、牧林のそれぞれ白河に関わる歌を掲げ、結びは次のようになっている。

此の兩人は坂東の人なるが、みなこの道に心を寄する人にて、したひ来たれるなるべし。

かくて夕月夜のおもしろきを伴ひて、横岡の宿に帰る程、作りあはせたるやうのゆふべなるべし。

いかにも紀行のスタイルを調べ、白河の関の印象深さを整理している。過去の白河の関に関わった歌人を参照し、つまりは読者としての宗祇の批評眼を示し、更には白河の関の文学史を踏まえて、文をとじる。過去の歌人の情報を踏まえ、宗祇自身の姿を整えたということであった。

最後に道興(1336～1572)の『廻国雑記』を参照したい。著者の道興が北陸、関東、奥州諸国を遊歴した際の紀行文であるが、当時の地方文化、交通路などを知るに大変有用である。白河の条を開いてみたい。

是よりいな沢の里、黒川、よささ川など打過ぎて、白河二所の関にいたりければ、幾木ともなく山桜咲き満ちて、心も言葉も及びはべらず、暫く花の陰に休みて、

春はただ花にもらせよ白河の せきとめずともすぎんものかは

同じ心を、あまたよみ侍りける中に、

とめずとも返らん者かおとにのみ ききしにこゆる白川の関

白川のせきの並木のやまさくら 花にゆるすな風のかよひぢ

(以下略)

以上、多くの歌人の着眼点が重なり、必ずしも個性的とはいえないが、むしろ先の歌人が着眼したところを踏まえ、その上に後世の歌人が各自の世界を構築し、しかも継続しているところに特徴があると見るべきであろう。それほどに、白川の関のトポロジーは明確で、歌人たちの心を震わせるにたる魅力を湛えていた。励起する力とでもいうべき作用を白河の関は持っていたのである。

それは白河関が、念珠関、勿来関と並んで奥州三関と呼ばれた重要な関であり、そこにいたる歴史の経緯がふくまれていたからである。また白河関が江戸に到るまでの長い時間、大和・京都・鎌倉政権との境界線であり続けたという、まさに歴史の含意がここにあるのだと思う。陸奥が青森一

県だけを指すようになるのは、非常に新しいことに属す。また東北六県という把握のされ方も、福島県以北を一括りに捉えようとする考え方もこれに基づいている。東北文化との接触最前線が白河関であったのだと考えられる。

さてところで、能因、西行、一遍、宗祇、道興、等々の越境者は、定住者に対する批評として存在する。また、大江健三郎の「異化」を念頭に考えてもよい。鶴見和子の『定住と漂泊』を導きにして、考える手続きもある。

小結

本稿完結には、『奥の細道』と『義経記』の検討がまだ残されている。次の機会にこの二作品を徹底的に読み解き、その構造が持っている中世語り物的ありようの特筆すべき姿を明らかにしなければならないと考えている。

注

※「社会イノベーション研究 第13巻 第1号」(成城大学社会イノベーション学会 2018年)所収。

- 1) 宋代の陸庵善卿(1098～1100)の撰になる字典。禅宗関係の書籍から熟語2400語を抜き出し、典拠を示し、注釈を施した書籍。
- 2) 龍猛(龍樹)、龍智は真言祖師の初祖と二祖にあたるインド僧で、空海が将来した唐画の『真言五祖像』に加えるために、その善無畏と金剛智の両画像にならって、日本で新図された(ブリタニカ国際百科事典)。
- 3) 巡検使。江戸幕府の臨時職員。幕領・私領巡視して、その政情、民状を復命させるために、派遣した役人。五代將軍綱吉のころから將軍代替わりごとに特派された。
- 4) 「吉次和讃」なるものが白河の皮籠集落に伝えられている。

吉次和讃

一、吉次吉内吉六が 義経様のお供して

奥州街道往来する 金の砂をば運ぶとや

二、馬の背中に皮籠を ならぶ足なみかろやかに

この一団を待ち伏せる 小阪峠の雨の中

三、やみ夜の中のたいまつに 弓矢のひびきときの声

長籠一味がおそいくる あわれや吉次兄弟は

四、刀の傷うけはうように 流れにのどをうるおさん

息たえだえの虫の音に 橋のたもとに伏せにけり

五、なぞのこともばもきれぎれに みつぼうつきの下にあり

南無八幡の現われて 主君の戦 果たせしか

六、義経様よ御無事でと 両の手合せ願うかな

念願かないて判官は 兄頼朝をたすけんや

七、吉次の霊は皮籠の 吉次八幡大菩薩

里の栄えの守り神 幾年伝え語られん

昭和四十九年八月吉日

吉次墓地改修記念 白坂山観音寺 中光作

白竜会長 佐藤 セン 寄贈

5) 上田正昭『記紀論究』(塙書房・1972)。上田氏は、語

り部論をなすに当たり、伝承の問題を歴史家の立場から
追究してられる。肯うべきである。

6) 中西進『旅に棲む—高橋虫麻呂論—』(中公文庫・
1993)